

巻 頭 言

わが鉄鋼業の発展と技術

芝 崎 邦 夫*



目下日本の鉄鋼各社は、その設備能力の増強に大奮である。
現在の日本の鉄鋼生産量は戦前戦後の最高生産を抜くどころか、その2倍余を越す大きな数量となつた。終戦直後、あの貧弱な生産に陥つていた当時、今日のこの盛況を想到したものは先づ無かつたであろう。事ほど左様に日本の鉄鋼は復興を通り越して益々その生産を高めている。かくして鉄鋼各社は合理化を含めて益々その能力の増大に努めている次第である。

しかし、鉄鋼のこの増強を世間が皆必ずしも正当視しておるわけではない。いわゆる過当設備競争だと非難する向きもかなりある。

鉄鋼会社の中にはその設備増強合理化資金の一部を世界銀行に仰いだものもあり、また現に仰がんと交渉中の会社もある。世界銀行から金を借りるには政府の保証が要るので、政府はその設備増強の必要性を裏付けなければならないが、それには日本の鉄鋼が益々伸びることの妥当性を説明しなければならない。そのために政府は日本の鉄鋼需要の伸びを想定するのであるが、その伸びを説明するのに毎度苦勞しているようである。政府が想定するほど鉄鋼が伸びるかどうか、多くのものが疑問に思うからである。

しかしながら事實は鉄鋼は力強く伸びているのであつて、現に政府が昭和32年9月に作成、引続き33年11月に改訂した鉄鋼5カ年計画の最終年たる37年度の生産を、この34年度ですでに達しそうな形勢である。

そこへもつて来て、更に大きな需要想定が、しかも国連から発表されたのだからはなはだ愉快である。その内容についてはすでに新聞や雑誌によつて報道されているが、要するに国連の欧州経済委員会鉄鋼委員会(ECE)が過去2カ年にわたつて専門家が研究調査したものを本年6月に発表したものであるが、これは15年先の世界鉄鋼業の規模がどのようになるかを予測したものである。この報告によると日本の鉄鋼生産高はこれまで世界の第6位であつたものが、約15年後には西ドイツ、英国をしのいで第4位となり、中国を除けば米国、ソ連につづいて第3位にのし上ると予測している。その数量は米国の145,000千t、ソ連の114,000千tにつづいて日本は37,500千tになるというものである。従来日本の鉄鋼は20,000千t位には伸びるだろうと称した者はあつたが、30,000千t以上を真面目に唱えたものは先づ無かつた。それを国連の鉄鋼委員会が、約15年先とはいえ37,500千tと発表したのだから愉快なわけである。

* 本会理事 富士製鉄株式会社参与生産管理部長

因みに中国については 15 年後には 72,000千 t, つまり日本の 2 倍, 現在のソ連の生産より遙かに大きなものになると予側しているのは別の意味で考えさせられるものがある。これは全く余談であるが例の長崎の国旗事件がもとで日中の貿易がとまるまでは, 中国は日本から相当大量の鉄鋼を輸入すべく交渉していた。その交渉最中に, 中国の要人達は, 中国の鉄鋼生産は遠からず英国を凌ぐのだとしきりに力説していたとのことがあるが, ECE の報告と関係なく言われたことではあるが, 両者併せ考えて見ると仲々面白い。

それはさておき, ECE の報告はまだ草案で各国の意見をきき, 調整して来年 3 月ふたたび発表するそうだが, 大勢については大きな変化はあるまい。

以上の次第で日本の鉄鋼がますます伸びることは間違いない。常識的に考えても, 食糧などは人口に必要なだけつくればよいが, 工業生産はいわばきりが無いわけで, ぐんぐん伸びている各種工業のことを思い併せると, 諸工業の基盤となる鉄鋼が伸びるのは当然であろう。

しかし, 以上のような情勢だからといって手放しで楽観するわけにはゆくまい。日本には原料に恵まれぬという立地的不利があるからである。しかしこの不利も世界の鉄鋼の伸びとともに世界的に平均化されて行きつつあるので, あとは技術だということになる。最近の日本の鉄鋼技術はよく伸びて, 銑鉄をつくる面においても, また鋼をつくる面においても, 世界一流国に負けないものが多々あるけれども新技術開発の余地はまだ非常に沢山残っている。製銑製鋼の安定操業だけを考えてもまだ改善の余地が数限りなくあり, 鉄鋼の材質上の問題でも不明なところが無数にある。したがって技術者の活躍する余地もまた限らない次第である。

最近鉄鋼各社が研究に益々力を注ぐようになったのは誠に喜ばしい現象であるが, 適当な研究員の獲得, 培養には苦勞しているようである。つまり鉄鋼技術者が足りないのである。今後の鉄鋼拡充を考えただけでも多数の技術者が要る。それに品質管理だ IE だという面をも併せ考えると技術者は益々不足する。鉄鋼技術者の大量養成が要請される所以である。